

外来部門に配置される精神保健福祉士の有効性に関する事例

事例1 「退院前支援が効果的であった事例」 対象：10代後半、女性、摂食障害

キーワード：退院前ケア会議、家族支援、入退院支援、ケアマネジメント、デイケア、訪問支援、多機関連携

I、発症～入院

両親の不仲、母親からの身体的心理的虐待があり10代前半より過食嘔吐出現し、入退院を繰り返した。高校進学後、数日で登校困難となり退学。過食嘔吐が再燃し、体重の低下顕著により再入院。約1年の入院後、退院の目処が立ち、日中活動の場に精神科クリニックデイケアの利用を計画。退院準備として、関係性構築のため、クリニック精神保健福祉士が退院前ケア会議に参加し、本人との関わりを開始した。

外来精神保健福祉士の役割 ➡ 信頼関係づくり「不安を減らして安心を増やす」

II、退院～外来治療

退院後はクリニックに通院しデイケアに参加していたが、過食嘔吐は継続しており、同居の母親のストレスが高まった。同時期に両親の離婚や転居が決まり、一家にとってストレスフルな状況が続いた。母子の物理的距離の確保、本人の安全確保、心理的フォローのため、デイケアに加えて外来精神保健福祉士と看護師による訪問看護や面接を継続的に行った。

外来精神保健福祉士の役割 ➡ 家族支援・心理的援助・危機介入・ケアマネジメント

III、再入院～生活の再構築

本人の身体的安全保持が困難となり、行政介入による再入院時に、母親より、本人との同居困難と訴えがあり、退院時に母親と別居する方針決定。入院中から病院とクリニックの精神保健福祉士が連携し役割分担を行い、居住確保、生活保護申請、障がい者福祉サービスの導入準備を行った。同時に母親に対しても家族支援を開始、母親の体調不良に対して医療機関へのつなぎ支援を行った。退院直前には主治医が本人の暮らす街へ出向きケア会議を実施、地域支援機関との顔つなぎや課題の共有を行った。

外来精神保健福祉士の役割 ➡ 入退院支援・家族支援・多機関連携・サービス利用支援・ケアマネジメント

IV、新しい生活スタート～現在

退院後は、初めての単身生活で困難さを伴いながらデイケアに参加。離れて暮らす母親との適度な距離を模索中。現在もデイケアを利用し、アルバイトに精を出している。困り事がある際には、母親だけでなく支援者への相談が増えつつある。

外来精神保健福祉士の役割 ➡ 心理的援助・家族支援・見守り支援

Point

幼少期から不安定な家庭環境の中で育ち、他者と安定した信頼関係を保ち続けることに困難さが見られるクライアントに対し、前回退院時から関わるクリニック精神保健福祉士が中心となり支援体制を構築したことにより、本人にとって負担が少なくタイムリーかつ円滑に地域移行・地域定着支援を行えた。

事例2 「外来ニートへの支援を行った事例」対象：40歳代後半、男性、うつ病

キーワード：訪問支援、ケアマネジメント、多機関連携、信頼関係づくり、本人の希望に沿った支援、

I、幼少時～発症まで

小学生時より高校卒業まで虐めに遭っていた。高2時に母親が病死し、アルバイトをして家族の世話にならずに生活した。高卒後は工場に就職。職場内でのつきあいは少なく、ストレスが溜まると物に当たったり被害的な捉え方をする傾向がみられた。30歳代で、中間管理職の立場になりストレス増大し些細なことで従業員との間でトラブルとなり退職、その後は転職を繰り返し、人間関係などのストレスにより働くことができなくなり生活保護利用開始となった。

II、治療へのつなぎと生活支援

その後は徐々に生活リズムが崩れ、室内の清潔が保てなくなり、ガスが壊れお湯を使うことが出来ない状態となるも管理人に相談できず不衛生な状態の生活となり、社会から孤立した生活に陥った。40歳になる頃に保健所職員同行により精神病院を受診し、2か月の入院となった。退院後も生活改善することなく経過し、保健所職員の支援によりクリニックを受診し治療再開した。「人に迷惑をかけて申し訳ない」「自分が変に思われるのではないかと考えてしんどい」「人といると被害的に考えてしまうから遠ざけたい」とのこと、通院継続困難で、昼夜逆転し、不衛生で孤立した生活を送っていたが、クリニック精神保健福祉士が自宅訪問し、次回予約の手紙を届け続けることで、かろうじて8年間治療関係を維持した。

外来精神保健福祉士の役割 ▶ ケアマネジメント・受診援助・信頼関係づくり「緩やかにつながり続ける」

III、新しい生活へ

40歳代半ばで、生活保護の家賃上限が下がったことを機に、転居により生活の変化を促す支援の見通しを立て、本人への効果的な提案方法について支援者間で何度も話し合った。本人に「今のままの生活を維持させることは難しいですよ」といったメッセージを継続的に送っていたところ、本人から生活保護課に「働きたい」との相談が上がった。そこで「今の家で生活を続けたい」との本人の希望に沿った支援を約束すると同時に、本人には健康的な生活環境を整えることを約束してもらい、協働して目標の確認作業を行った。支援者チームで役割分担を行い、大家さんへの家賃の値下げ交渉、自宅の大掃除、ガス給湯器の交換、ヘルパーサービスの導入などを行った。また、就労に向けた第一歩としてデイケアへの通所も開始した。支援が動き出すと本人も役割を持ち努力をはじめ、自宅の清潔を保持され、栄養バランスの良い食事を作るなど生活リズムが改善され、就労継続支援B型事業所に通所開始となった。

外来精神保健福祉士の役割 ▶ ケアマネジメント・多機関連携・生活支援・サービス利用支援

Point

外来精神保健福祉士が中心となり継続して寄り添う関わりをベースに、無理強いせずに適度に緩やかな促しを行い、半歩先の状況を視覚化し情報提供や提案を重ねたこと、失敗は貴重な経験であり、前進後退するのは普通であることを支援チーム全員で伝え続けたことにより、本人が自分の人生について考え始め、頑張りたいという意味を取り戻されるといった変化へとつながった。